

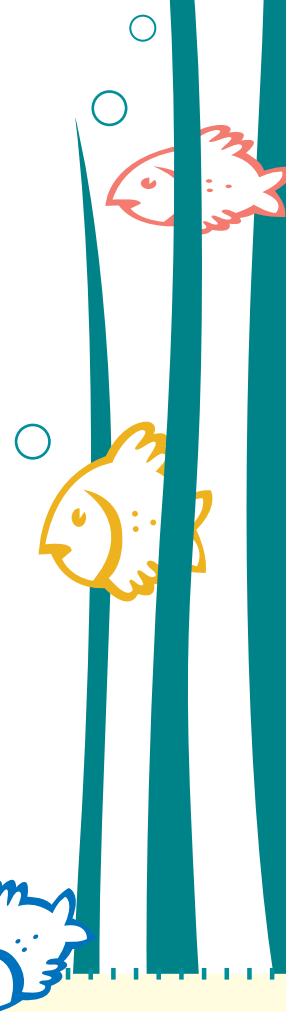
# Newsletter of

日本サンゴ礁学会ニュースレター

1999 Vol. 4

Sep.

# J Coral Reef Society



連

1. サンゴ礁に暮らす人々 -3-  
[ 島に帰ってきたドン ]

載

2. サンゴしょう夜話 -3-  
[ マーカス・ウエーキ海山列 ]  
3. 若手会員の目 -3-

— 連 載 —

サンゴ礁関連施設探訪  
八重山海中公園研究所  
Yaeyama Marine Park Research Station

## 連載 1 サンゴ礁に暮らす人々 -3-

### 島に帰ってきたドン 慶應義塾大学 近森 正

どこの島でもそうなのだが、とりわけ遠く離れた環礁に住む人々には、現金収入の機会がない。若者たちの多くは、つぎつぎに島を去っていく。それでも外の世界に働き口があるときはよい。仕事がなくなれば、仕方なく島にもどってきてしまう。

「島では魚もタロイモも、みーんなタダなんだ。ここではお金は要らない。」 彼らはほっとしたような口振りで、そう話す。

ドンもそんな若者のひとりである。十数年も前、家族とともにニュージーランドに働きに出て、長いこと自動車工場で働いていた。ちびたゴムぞうりをひきずってはいるが、鼻の下にチョビひげをつけ、都会仕立ての新品のズボンをはいて、島のベスト・ドレッサーをきどっている。

その彼が仲間と一緒にヤシガニ採りに出かけ、指を挟まれて大怪我をした。ヤシガニひとつ、捕まえるすべを知らないのだ。トビウオ漁に出かけても、押し寄せる魚群の前でうろたえるばかりだ。車の修理工として腕をふるった彼も島では、まったくの役立たずだ。

魚の習性を知り、波の形、風の向き、海底の地形、あらゆることを知らなければ、島では生きていけない。それらは子供から大人になるまでに、ひとつひとつ、島の言葉とともに学んでいくのである。学校教育では教えられないことのない島の固有の知識なのである。子供の時に島を離れた彼には、その知識を得る機会がなかったのだ。

今日では、そうした若者が多くなった。彼らにはナイロン製の刺し網やスピア・ガン、ときには爆薬までしかけて魚をかたっぱしから捕える方法しかない。昔は稚魚や対象外の魚を逃がしてやるような工夫が漁具に施してあって、過剰利用を未然に防いできたのだが……。年寄りたちがきびしく戒めてきたタブーの魚だって、みな捕獲してしまう。タブーを犯したものに天罰を与える神々は、もはやいない。キリスト教会の神様は資源保護にはとんと興味をお示しにならないからだ。ラグーンでいっぱい採れた真珠母貝は、以前、塗料の材料になるといって買い付けにきた商人に売るために、すっかり採りつくしてしまった。

島の固有の知識が失われ、資源の持続的利用をさだめてきた慣習法が守られなくなったとき、生物の種の多様性もまた失われるのである。個別の文化とサンゴ礁生態系は、ともに一つのより大きく、複雑な体系の部分を構成しているのである。

ドンはふたたび、島を去ろうと思いはじめている。



## 連載 2 サンゴしょう夜話 -3-

### マーカス・ウエーキ海山列

金沢大学名誉教授 小西 健二

1954年3月ピキニ環礁の水爆実験で被爆した、マグロ漁船第五福竜丸がたどりついた、太平洋プレート上唯一で日本最東端の領土は南鳥（マーカス）島であった。翌年7月、私が初の海外旅行の最初の経由地で、いまはなきパンナム社DC-7の給油時間に、手をふれた初体験のサンゴ礁（ラグーンの縁でシングル）はウエーキ環礁であった。両島とも、白亜紀中・後期のウエーキ・マーカス海山列の頂上が海面に届くサンゴ礁である。このような私的な思い入りを背景に、Wilson (1963)

やMenard (1973, 1978) が、太平洋プレートの沈み込みでできた海溝外側隆起帯の隆起環礁と、引用するBryanの原記載 (1903) への強い疑念とともに、南鳥島調査の夢は私のなかで膨らみ続けた。

中・高校の畏友K君の尽力で、防衛庁は研究の内容を理解し、空路と現地宿泊の便宜をはかられ、"立て看"騒動を案じた勤務先の大学当局からも、"研究上貴重な機会だ、是非行ってきたまえ"と励まされ、硫黄島まではC-1、その先はYS-11改造機に乗り継ぎ、目的地の土を踏んだのは1979年5月であった。空中写真は、畏友西村溪二学兄のお世話になった。その結果、学士院記事 (1985) や海洋科学 (1986) などに報じたように、最高点の海拔高度は一桁違い、隆起段丘はストーム時にシングル斜面につくられたステップ、"exposed reef"とされた地表最古の堆積物は粗粒なビーチロック (写真; 撮影1979年5月12日) であることがわかり、"海溝外側隆起帯"仮説を否定できた。翌1980年秋の米国地質学会 (アトランタ) で発表後訪れた、米国地質調査所 (レストン) では、評判のピック・アンド・ハンマー祭のパーティーの席上、激務と病に蝕まれはじめたMenard所長に直接詳しく伝え、歓談することができた。

Schlanger・Wintererらとユネスコ海洋科学研究会議作業班を設け、是非とも太平洋で環礁掘削計画の再開をと腐心する私は、国際深海掘削計画でマーシャル諸島の環礁 (礁湖) 底を掘削する案をすすめる一方、陸上掘削候補地に南鳥島をあげたところ、バブル下経済もあずかってか、瞬く間に日本が同島で掘削開始との風説が世界を一周し困ったりした。紆余曲折のあと、具現直前に亡くなったSchlangerへの弔意に支えられ、1993年にODP; Leg143, 144の二航海で実現することとなり、たまたま首席研究者に推薦されたが、公務と体力から、無念にも辞退せざるをえなかった。この航海の成果は井龍康文ほかの報告に詳しい。OD21掘削船によるマントルへのライザー掘削が実施されようという今、南鳥島掘削の実現化も強く望まれる。





謹啓

サンゴ礁学会員の皆さま、お変わりなくご活躍のことと存じます。下記の要領で日本サンゴ礁学会第2回大会を開催いたしますので、ふるってご参加下さい。参加ご希望の方は下記の申し込み表にご記入の上、お申し込み下さい。

講演の申し込みは9月20日をしめきりとします。大会への参加のみの場合、当日参加も受け付けますが、あらかじめお申し込みいただくと助かりますのでご協力をお願いいたします。

敬具

第2回日本サンゴ礁学会準備委員会

記

会場：公開シンポジウム 沖縄県庁講堂（那覇空港よりタクシー10分）  
懇親会 サザンプラザ海邦（沖縄県庁より徒歩10分）  
総会・一般講演 琉球大学共通教育棟（那覇中心部よりバス40分）

日時：1999年10月29日（金）9時～ 評議員会（場所未定、後日連絡）  
29日（金）13時30分～17時 公開シンポジウム  
「白化現象とサンゴ礁の未来に関する国際シンポジウム（仮題）」  
29日（金）18時30分～20時30分 懇親会  
30日（土）10時～12時 総会（琉球大学共通教育棟）  
30日（土）13時～17時 一般講演・特別セッション（同上）  
31日（日）9時～17時 一般講演・特別セッション（同上）  
「サンゴ礁における白化現象のその後」白化問題特別委員会ほか

参加費：大会参加費・一般会員 4,000円 / 学生会員 2,000円  
・懇親会費 5,000円

送付先：琉球銀行坂田支店 普通預金 78642 日本サンゴ礁学会沖縄大会

参加申込先・講演要旨送付先：  
沖縄県本部町瀬底  
琉球大学熱帯生物圏研究センター 酒井一彦 宛  
\*詳細は別紙参照。

大会全般に関する問い合わせ先：  
琉球大学理学部海洋自然科学科 土屋 誠  
電話・Fax: 098-895-8540  
e-mail: tsuchiya@sci.u-ryukyu.ac.jp

### 目次

- 連載1：サンゴ礁に暮らす人々-3-  
「島に帰ってきたドン」・・・ p.2
- 連載2：サンゴしょう夜話-3-  
「マーカス・ウエーキ海列」・・・ p.2
- 会告：日本サンゴ礁学会第2回大会ご案内・・・ p.3
- 連載3：若手会員の眼-3-・・・ p.3  
日本サンゴ礁学会第一回総会  
および評議員会議事録・・・ p.4
- 連載4：サンゴ礁関連施設探訪-3-  
[八重山海中公園研究所]・・・ p.7

## 連載3 若手会員の眼 -4-



**今日は、はじめまして。** 東京大学地理学教室の田中義幸です。私達の教室を会員の皆さんに紹介します。そもそも地理学教室におけるサンゴ礁研究は、1980年に米倉伸之教授がコーネル大学のブルーム教授と、バヌアツのサンゴ礁の地殻変動を調査したことに端を発します。

私の指導教官、茅根創助教授は、大学院生当時、米倉先生とミクロネシアの島々で、ひたすら掘削調査をして、後期完新世の海面変動を明らかにしました。あまり大きな声では言えませんが、現在は安全管理に特に厳しい茅根さんも、学部時代は素潜りで24mまで潜って死にかけたり、海中でビールを飲むためにはどんな工夫をしたらよいか真剣に考えたりしていたようです。

時はくだって1995年、茅根さんが教官として着任し、サンゴ礁における二酸化炭素の循環の研究を当教室で行うようになると、沖縄県の石垣島をはじめ、サンゴ礁を研究のフィールドとする学生が増えました。茅根さんの指導学生第1号は博士課程3年の山野博哉さん、「サンゴ礁礁原の堆積過程」をテーマとして現在博士論文を執筆中です。博士論文を書くのは、たいへんなはずなのですが、周りにそれをほとんど感じさせないボーカークフェイスです。博士1年には、サンゴの繁殖戦略をテーマとしている波利井佐紀さんがいます。波利井さんは、東京水産大学で東京湾のニホンアワサンゴを修論にまとめています。時には、かなりの「天然」ぶりが露顕することもあるようです。同じく、博士1年の堀和明さんは「琉球列島の島棚地形」の特徴を解析し、同姓の東京都立大学の堀信行教授のモデルを再検討していました。しかし、最近別の方向にシフトチェンジ（山野さんのストーリーではありません）したようです。修士2年にはサンゴの年輪を利用して、環境の復元を目指している森本真紀さんがいます。無類のお菓子好きで、机の引き出しはお菓子で満たされています。研究室一の負けず嫌いです、たぶん。修士1年には、梅沢有君、誰も彼のことを海沢（うみざわ）君とは呼んでいません（注：本誌vol.1参照）。現在彼は、海洋研究所でサンゴ礁域に流入する栄養塩の分析をしています。「女泣かせ」だという噂がありますが、定かではありません。学部4年の渡辺敦君は、この間までナマコの分布を調べており、みんなから「ナマちゃん」と呼ばれておりました。しかし、未来に不安を覚えたのか、この夏から急遽、赤土の流出にテーマを変更しました。これからは「赤ちゃん」と呼ばれるのでしょうか？同じく4年の篠原直樹君は礁嶺の発達と砂の構成要素の関係について研究をしています。ほとんどの人と「ため口」で話す大胆な奴ですが、泳ぎながら、波に酔ってしまうとい繊細な一面も持ち合わせています。さらに、化学分析のエキスパート、工藤節子さんが研究員として実験や分析を強力にバックアップしてくださっています。また、小林稔さんは、茅根さんの所からあふれてくる多量の事務を処理してくれています。小林さんがいなくなったら、学会の事務も滞ってしまうかも知れません。

さて、最後になりましたが、私、田中は修士の2年。学部時代は国際基督教大学で文化人類学を専攻し、あの「お通り（気を失うまで酒を飲み続ける風習）」で有名な宮古島で祭祀組織の研究をしていました。その後、某金融機関で3年弱の勤務の末、この研究室に流れ着きました。テーマはサンゴ礁域における海草や海藻の分布を規定する要因を明らかにすることです。風（カイト）にカメラをぶら下げて、上空から撮影したりもしています。声も大きく、リアクションも大きく、無駄な動きも多いらしく、「田中がいるだけで部屋の温度が2度あがる」などと言われています。

当研究室では研究テーマ・性格とも多岐に渡った学生を取りそろえています。「ボーカークフェイスなら、俺の方が上だ。」「天然なら負けないわ」「泣かせた女の数なら・・・」など我こそはと思う方は、ご一報下さい。私たちがお相手します。



# 日本サンゴ礁学会第一回総会 および 評議員会議事録

## 日本サンゴ礁学会第1回大会 総会

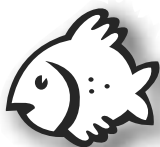
日時：1998年11月1日（日）午前9：30～11：45

場所：東京大学山上会館

議長：土屋誠・中森亨・菅浩伸

報告および審議事項

1. 事務局および各委員会からの活動報告
2. 予算の執行状況について
3. 今年度の大会運営について
4. 新評議員および新会長などの紹介
5. 次年度活動計画
6. 審議事項  
事業年度の変更について  
評議委員の任期の変更について
7. 白化問題について
8. 次年度大会について



## 議事録

### 1. 事務局および各委員会からの活動報告

第1回大会司会（茅根創）より、総会の出席者が委任状を含めて79名となり、総会が成立したことが報告された。前会長（山里清）が第1回大会の開会を宣言した。

第1回大会総会の議長として土屋誠、中森亨、菅浩伸の3氏が推薦され、承認された。事務局より学会会員数が244名に達したこと、平成10年6月に評議委員会を開催したこと、メーリングリストSANGOを開設したこと、名簿の管理と郵送を学会事務センターに委託したことが報告された。企画委員（中森亨）より総会までにサンゴ礁学会設立記念出版物の出版を予定していたが、年度末まで延期されたことが説明された。選挙管理委員（工藤君明）から今年度行われた評議員選挙の結果について説明があった。学会誌編集委員（土屋誠）より学会誌の誌名が『Galaxea, Journal of Japanese Coral Reef Society』から『Galaxea, Journal of the Japanese Coral Reef Society』に変更されたことと現在原著論文4編が投稿されていることが報告された。ニュースレター編集委員（野崎健）よりニュースレターを3回発行したことが報告された。係の名称をニュースレター編集委員から広報委員会に変更する旨が伝えられた。

### 2. 予算の執行状況について

事務局から会則により事業年度が1月1日～12月31日となっているため、総会以前に決算することができず、総会で会計報告ができないことが説明された。さらに、平成11年度の予算案が平成11年11月の総会まで承認されないことが明らかになった。今年度の決算の代わりにこれまでの予算執行状況が報告された。

### 3. 今年度の大会運営について

第1回大会委員長（近森正）より大会の日程が紹介された。現在、深刻になっているサンゴ等の白化に関する報告会と討論会を急遽開催することが提唱された。11月3日に日本サンゴ礁学会公開シンポジウム『初めて知るサンゴ礁の神秘』の概要が説明された。

### 4. 新評議員および新会長などの紹介

選挙の結果、新しく選出された評議員27名「秋道智弥（国立民族博物館）、大森保（琉球大学）、大森信（東京水産大学）、茅根創（東京大学）、河名俊男（琉球大学）、菅浩伸（岡山大学）、工藤君明（海洋科学技術センター）、小西健二（金沢大学名誉教授）、下池和幸（阿嘉島臨海研究所）、立田穰（電力中央研究所）、近森正（慶応大学）、土屋誠（琉球大学）、中井達郎（日本自然保護協会）、中野義勝（琉球大学）、中森亨（東北大学）、西平守孝（東北大学）、野崎健（電子技術総合研究所）、長谷川均（国士舘大学）、林原毅（西海区水産研究所）、日高道雄（琉球大学）、藤原秀一（海中公園センター）、堀信行（都立大学）、松田伸也（琉球大学）、松本英二（名古屋大学）、目崎茂和（三重大学）、山里清（名桜大学）、横地洋之（東海大学）」が紹介された。新評議員の互選により、次年度新会長として山里清氏を、新副会長として近森正氏を選出した。新会長が次年度の抱負等を語った。新会長より各委員長など（副会長：近森正、会計監査：大葉英雄（東京水産大学）・根岸明（電子技術総合研究所）、企画委員長：中森亨、編集委員長：土屋誠、広報委員長：野崎健、選挙管理委員長：工藤君明、事務局長：茅根創）が紹介された。

### 5. 平成11年度活動計画案について

各委員長等が以下の平成11年度の活動計画案を説明した。

#### 1)事務局長（茅根）

今後、学会誌の出版を考慮すると、予算が逼迫することが予想され、会員の獲得に重点的に取り組む。

#### 2)企画委員長（中森）

サンゴ礁学会設立記念出版物の出版を行う。国際サンゴ礁学会2001年年会と2004年シンポジウム誘致の立案を行う。サンゴ礁学会のロゴマークを作成する。

#### 3)学会誌編集委員長（土屋）

論文投稿規定を作成し、原著論文を広く募集する。可能であれば、白化の特集号も検討する。

#### 4)広報委員長（野崎）

サンゴ礁学会のホームページとパンフレットを作成する。ニュースレターを年3回刊行する。

#### 5)選挙管理委員長（工藤）

前回の選挙方法が複雑で混乱した会員もいた。今後、何らかの簡素化を計る。

### 6. 審議事項

事業年度の変更について

会則の不備により、総会にその年度の決算が報告できないことが明かとなった。

これを解消するため、会則5条の事業年度が1月1日～12月31日であったのを7月1日～6月30日に変更し、平成10年度を平成11年6月30日まで延長することが提唱された。

審議の結果、賛成多数で決定された。

評議委員の任期の変更について

事業年度の変更にもとない、前評議員の任期を平成11年6月30日まで延期し、新評議員の任期を平成10年11月1日～平成12年の総会までとすることが提案された。

審議の結果、賛成多数で了承された。

### 7. 白化問題について

今年の夏に深刻化したサンゴ等の白化問題について日本サンゴ礁学会が迅速に対処することが多くの参加者から要望された。学会レベルでは白化問題特別委員会を設置し、文部省や報道機関に積極的に働きかけることが提案された。また、今回の大会で報告される白化の状況に基づき、討論会で大会決議を行うことが要求された。

### 8. 次年度大会について

平成11年度の大会を平成11年11月頃に沖縄で開催することが報告された。-----



日時：1998年10月31日（土）15時～17時

場所：東京大学理学部地理講義室

定数27、出席24、委任状（2）、欠席1

## < 報告事項 >

### 1. 事務局（茅根）

会員動向 総会通知の遅れについて

### 2. 各委員会の発表

#### 1) 企画（中森）

「日本におけるサンゴ礁研究」10件受け付けた内、8件が査読に回っている。締め切り本日なので、ぜひ原稿を出して欲しい。予算の関係上、今年度中に出さないといけない。

#### 2) 選挙（工藤）

9月に223票分の投票用紙を送付（1件もどり）、107票分投票あり。複数の候補に投票したものは、今回は無効にした。しかし、各分野1名ずつ投票するのは不自然である。各分野定数名以下の投票が出来るよう、細則8条を変更して、無効票を減らしたい。（審議事項）

#### 3) 学会誌（土屋）

現状、4件の投稿がある。査読を依頼している。締め切りは、現状設けていないが、今後検討する。琉球大学、熱帯生物圏研究センターの「Galaxea」は、これまで、休刊扱いであったが、この10月に廃刊された。ISBNは、近日中に取得の見込み。学会誌の名称「日本サンゴ礁学会誌Galaxea, Journal of Japanese Coral Reef Society」の「of」のあとに「the」をいれるべきだと、ネイティブから、2件指摘を受けている。（審議事項）

#### 4) 会報（野崎）

1月、6月、9月にニュースレターの送付を行った。ニュースレターの発行のタイミングを検討したい。（審議事項）活動に沿って発行すべきだし、N.L.3号を投票用紙と合わせて送ったように、郵送が必要なもの併せると、郵送料を節約することが出来る。ニュースレター委員会を、ホームページなども含めて活動する「広報委員会」と改め、活動内容を展開したい。（審議事項）

#### 5) 事務局（茅根）

会計の途中経過について、会計年度と総会開催時期のずれによる会計監査 予算策定の問題点について（審議事項）近森：今回入会の人今年度分を払うのか？ ニュースレターはさかのぼって渡すから、それでよい。小西：賛助会員と団体会員の違い？ 工藤：賛助会員は学会を支援する個人 団体。野崎：賛助会員は学会の要旨集がもらえるというくらいのサービスをして良い。

### 3. 1998年大会大会実行委（近森）

11/1、2. 東京大学山上会館にて行う。51件の発表が予定されている。白化のセッションを組み込む対応など、野崎さんにご尽力いただいた。フィロソフィーとして「会員・会友の増強と啓蒙」「学会のホライズンをひろげること」を掲げ、11/3には、早稲田大学、井深ホールで公開シンポジウムを行う。（工藤さんの尽力でアリナ・シュマントさんの講演。茅根さんの努力で山根一真さんに司会を依頼し、学際的な議論を行う。中井さんの紹介で、サンゴ礁保護協会が資金・会場設営・ポスターなどをサポート、保護協会の写真パネルを当日会場に展示。東大安田講堂 慶応三田ホール 早稲田井深ホールと変更したのは400人程度の入場を見込んだため。保護協会には、ロゴマークがあるが、日本サンゴ礁学会にはないので、ニュースレターのロゴを使用した。（将来の検討事項）

各座長、よろしくお願いします。中井（大会渉外担当）報道に話題を提供した。10/31の読売新聞朝刊「編集手帳」にも紹介された。テレビ朝日が11/1に撮影に来る。山里：皆さん安心して、大会を迎えましょう。

## < 審議事項 >

### 1. 事業年度の変更（事務局：茅根）

茅根：会計年度が1月から12月であるのに、総会が1月に開かれるために、前年の12月締めの決算報告を10カ月後の総会で行い、会計年度の残り期間が2カ月になった段階で、始めて予算が承認されるという不都合な状況であり、今回の総会でも、会計監査・予算の承認を行うことが出来ないの、相談したい。改善策として、

- 1) 12月に締めて、このための総会を3月に開く。
- 2) 大会も以後は3月にする。
- 3) 会計年度を9月～8月にするという解決策がある。ただし、3)には最初の年の会費をどうするかという問題がある。

山里：「4月から3月」、「1月から12月」以外の年度でも良いのだろうか？ 茅根：やはり、12月にしめたら、翌3月に総会。3月にしめたら、夏に総会？（一部省略）

西平：最終的に総会では、承認してもらわなくてはならない。8月はフィールドワーク上、重要な月ではないか？ 工藤：オーストラリアでは、7/1～6/30が会計年度。呼び方は「1998/1999年」としている。（一部省略）

茅根：付則には、「評議員の任期は総会まで」とある。付則を変更して、6/30まで延長する。6ヶ月延びるので、ニュースレターは4号の次も現行予算のから出す。何とかする。（一部省略）

### 2. 大会プログラムの変更について（配布資料）

### 3. 評議員の旅費について（一部省略）

### 4. 選挙（工藤）

（議事前出、「細則変更」）細則8条を「1名の」を「定数名以下の」に変更すること（評議員会にて承認）（一部省略）

### 5. 学会誌（土屋）

（議事前出、「学会誌の"the"」）団体の英文名はそのまま。学会誌には「of」のあとに「the」をつける。N.L.は表紙の大きな文字「ロゴ？」はそのままよいが、下の小さな文字には、「of」のあとに「the」をつける。

### 6. ニュースレター（野崎）

（議事前出、「広報委員会」）ニュースレターだけでなく、広く広報活動を行うことに伴い、名称を「広報委員会」に変更したい（評議員会にて承認）（一部省略）

### 7. 広報（野崎）

（議事前出、「N.L.発行のタイミング」）活動とマッチさせることを検討する。

「質疑」（一部省略）

-----

Coral Reef



## 1998/1999年度第3回評議員会議事録

(新評議員により第2回に引き続き開催)

新評議員紹介。野崎の推薦により山里会長を賛成多数で選任。

工藤：会長枠で3名まず決めるべきでは？山里：基本的に副会長以下、前任者が留任。監査については、大葉、根岸に依頼(前出) 企画委員に、工藤、立田(大森信の推薦による)：生物関連者を増強し、科学技術振興調整費とのルートを。「会長特別枠には以下の候補」 茅根：山野博哉(院生)に評議員参加を打診する。(一部省略)

### <<1999年事業計画>>

事務局(茅根)

スケジュールの的確な管理を行う。総会の通知に不手際があったので今後注意する。メールで議論を行っていくことを了解してほしい。事務センターに委託したので、会員管理はうまくいっている。会長・副会長にも相談して賛助会員を募りたい。

企画(中森)

今年度は出版を行うが、来年度はその予定はない。国内・海外の学会対応を行っていききたい。国際サンゴ礁学会の評議員の推薦を検討したい。山里：国際サンゴ礁シンポジウム、太平洋学会議がそれぞれ4年毎に行われているが、2年毎のこれらが行われない年に、ISRSの総会が行われている。次回、日本に誘致できる可能性があるのは、2001年の総会。企画委員会はこれらを念頭に活動して欲しい。

学会誌(土屋)

雑誌を出すことが目標。色々なところで現行を募集する。白化特集号あるいは、第1号に白化の特集をすることを検討している。

広報(野崎)

N.L.の発行、6月、9月、12月はほぼ固定して良いと考える。場合によっては、年3回でよいかも知れない。検討のうえ、相談する。山里：海外に発信するメディアがない。茅根：Reef Encounterに、学会設立の情報は提供した。学会の活動を都度、投稿して欲しい。山里：企画委員会でどうでしょう？ 中森：やりましょう。

選挙(工藤)

しばらく、暇になる。会友会員等を、事務局と協力して増やしていきたい。ファンを増やすために、会友会員はある。学会生き残りのために裾野を広げてゆきたい。(一部省略)

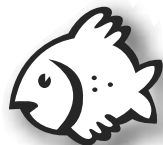
### <<1999年予算案>>

事務局(茅根)(前出)

### <<1999年度大会>>

議長は、昨年に引き続き、中森・菅・土屋にお願いする。「議事の新旧の仕分けについて議論」、「発表を詰めた関係上、総会をあまりに早く終わらせるわけにはいかない。」、「次回の大会の準備委員長は土屋」。

-----



## 1998/1999年度第4回評議員会議事録

日時：1999年7月17日(土)13時～16時

場所：東京大学理学部5号館地質・鉱物講義室

出席者：山里会長、近森副会長、大森(保)、大森(信)、茅根、河名、工藤、小西、立田、土屋、中井、中森、野崎、日高、藤原、松田、松本、山野(以上評議員)。田中、渡辺(以上事務局付)。委任状：秋道、菅、下池、中野、西平、長谷川、林原、目崎、横地(評議員)(評議員数28名、出席者18名、委任状9通)

1. 会長が、議長を事務局長に委任した。

### 2. 報告事項

1)事務局(茅根)：会員動向について、1999年5月末現在で会員数が300名(通常222名、学生48名、賛助8、団体4、会友12名、名誉2名、海外4名)である。会計について、初年度(1997年11月～1999年6月)の収支は、未支出の学会誌とニュースレター4号の印刷・郵送代等を初年度会計から支出することを見積もれば、収支がほぼあう。1999年6月末までの収支を見積もりも含めて監査してもらう。

2)学会誌編集委員会(土屋)：通常論文5報、白化に関する論文10報を受理した。9月中に発行予定。印刷費の見積もりを報告した。

3)白化問題特別委員会(土屋)：様々な省庁の緊急調査、プロジェクトに白化委員会委員、学会員が参加している。本年10月の大会で報告会を開き、情報交換を行ないたい。

4)1999年大会(土屋)：大会のスケジュール(10月30、31日)と準備状況について報告した。10月29日には学会、亜熱帯総合研究所、沖縄県の共催でシンポジウム「白化現象とサンゴ礁の未来」という題目でシンポジウムを開催の予定である。他との共催についても検討している。シンポジウムについて、主催は学会として、他の機関が共催か協賛かはっきりさせるべきとの意見があった。

5)企画(中森)：記念出版物「日本のサンゴ礁研究」は、15の原稿が集まり、10月の大会で会員に配布する。ロゴマークは、とりあえず文字だけのものをプロのデザイナーに依頼する。

6)広報(野崎)：ニュースレター第4号を発行予定。学会のホームページを立ち上げるために、加藤 健さんと山野さんを担当にしたい。

### 3. 審議事項

1)学会誌(土屋)：英文校閲、発行部数、会員外への頒布価格について議論が必要である。英文校閲については、投稿者の責任と編集委員の努力で対応するしかない。適当なネイティブがいたら評議員各自が支援を依頼する。部数は会員数300+200部、頒布価格は会費と原価の中間の4000円とすることで了承された。学会誌の広告について、A4モノクロ1ページで5万円(半ページは半額)とし、評議員各自が心当たりをあたることになった。

2)大会について、白化のセッション以外に地球科学系のセッションを検討することにした。

3)国際対応(山里・立田)：国際サンゴ礁イニシアチブ(ICRI:International Coral Reef Initiative) 国際サンゴ礁シンポジウムへ、学会として対応するべきではないかとの提案があった。ICRIについては、政府と研究者が一体となって対応している諸外国に対して、研究者の対応が遅れている日本の現状は残念である、学会としても対応するべきである。これに対して、ICRIは政府間のものであるから、学会独自で対応できるものではないという意見があった。

議論の末、研究者、政府、NGOなど参加対象をより広くして「日本が国際貢献できることは何か?」といったテーマで1999年10月の大会でセッションを設けることを検討すること、セッションを藤原さん、中井さんがオーガナイズすることで合意した。

国際サンゴ礁シンポジウムについては、次次回2004年のシンポジウムを日本に誘致することは困難との見通しが大勢だったが。その次2008年の誘致もにらみ、また日本のサンゴ礁研究のPRをするためにも、ブースを設け誘致活動を展開することを合意した。活動は、中森、立田と沖縄からの評議員が立案する。

(紙面の制約で一部省略、全文は開設予定のJCRSホームページを参照のこと)

以上



# サンゴ礁関連施設探訪

## 八重山海中公園研究所

### YaeYama Marine Park Research Station



黒島は周囲約12kmの平坦な隆起サンゴ礁からなる小島で、北側を除く島の周囲には発達した裾礁が連なる。河川はないが、発達した礁池や礁原、大小さまざまな離礁、キノコ岩、ビーチロック、長大な砂浜、そして礁池には干潮時に岸から外洋礁原まで歩いて渡れる特異な橋状地形（当地ではワタンジと呼ぶ）などの多彩なサンゴ礁地形が見られ、それらに対応した多様な生物群集も観察できる。石西礁湖、特に黒島や小浜島の礁池内のサンゴ群集は昨夏の高水温のために大きな被害を被ったが、幸い、黒島近辺の離礁は被害は軽微で、ここでは八重山でも屈指のサンゴ群集景観が堪能できる（写真は黒島港前の離礁）。

#### 八重山海中公園研究所の案内

交通：石垣港から客船で30分、  
黒島港から車で5分。  
資料室見学料：100円（年中無休）  
施設利用料：500円／日  
研究所宿泊料：1000円／日（6名まで）  
付随設備：研究船、海水取水設備など。  
住所：〒907-1311 竹富町黒島136  
Tel & Fax：09808-5-4341

研究所は黒島港から約2km離れた西海岸に位置し、1階建ての棟内に、資料室（貝類、サンゴ類及びウミガメ類関係）、飼育実験室、研究室、宿泊室それに会議室などがあり、資料室及び飼育実験室は一般に開放されている。宿泊室は自炊可能な学部生、若手研究者を対象に6名まで利用でき、一般研究者には隣接するリゾート「マリンビレッジ」が割引価格で利用できるようになっている。研究員は2名が常駐し、「石西礁湖海域のサンゴ群集の動態調査」と「黒島西ノ浜におけるウミガメ類の上陸・産卵調査」を継続的な業務として、サンゴ礁生物の研究活動を行っている。（執筆者：八重山海中公園研究所 研究員 野村恵一）

石垣島と西表島の間には日本最大規模のサンゴ礁が広がり、その内側の浅い海域を両島の頭文字を取って石西礁湖と呼ぶ。石西礁湖はサンゴ群集の多様さと景観の美しさから、ほぼ全域が西表国立公園区域に含まれ、さらに、4つの海中公園地区が指定されている。八重山海中公園研究所は、海中公園地区を始めとする石西礁湖のサンゴ礁生物の保全と研究の基地として、1975年に礁湖南端の黒島に作られた。和歌山県串本にある鏡浦海中公園研究所に次ぐ、財団法人海中公園センターの2番目の付属研究所に当たり、両研究所とも創設者は「日本の公園制度設立の父」として名高い故 田村 剛先生である。



## 編集後記

編集委員長の野崎の不幸でニュースレターの発行が大変遅れまして、多くの皆様にご迷惑をお掛けしたことを深くお詫び申し上げます。

本ニュースレターについてご意見等ありましたら  
[e6806@etl.go.jp](mailto:e6806@etl.go.jp)までe-mailをお送りください。



日本サンゴ礁学会ニュースレター

Newsletter of Japanese Coral Reef Society Vol.4 1999年9月15日発行

編集・発行人 / 野崎 健

発行所 / 日本サンゴ礁学会

事務局 / 茅根 創

[<kayanne@geogr.s.u-tokyo.ac.jp>](mailto:kayanne@geogr.s.u-tokyo.ac.jp)

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学理学系地理  
 Fax：03-3814-6358

新しい時代に対応する

**KIMOTO****の環境モニタリングシステム**●●●●● **クレスト号** ●●●●●

サンゴ礁における海水・大気中のCO<sub>2</sub>の連続計測を目的とした計測プラットフォームで、海洋大気二酸化炭素自動測定装置、全炭酸、アルカリ度連続測定装置、pH水温塩分計・電源システム、無線テレメータシステムを搭載しております。

このシステムは、科学技術振興事業団が実施している戦略的基礎研究の一つで東京大学や通産省工業技術院などの研究グループ（研究代表者・茅根創東大助教授）が行っている研究の一環として開発され、平成10年から11年にかけて沖縄県石垣島白保のサンゴ礁海域において現在もなお計測稼働中です。

**営業品目**

全炭酸・アルカリ度連続測定装置

アンモニア自動計測装置

全リン自動計測装置

ORP計測装置

ダイオキシン用ハイボリウムサンブラ

二酸化炭素自動測定装置

全シアン自動計測装置

全窒素自動計測装置

水質自動計測装置全般

PM2.5微粒粉じんサンブラ

COD自動計測装置

クロロフィルa計測装置

pH計測装置

環境大気計測装置全般

すみよい自然環境を求めて!!

**KIMOTO**

ホームページ <http://www.kimoto-electric.co.jp/>  
Eメール [sales@kimoto-electric.co.jp](mailto:sales@kimoto-electric.co.jp)

**紀本電子工業株式会社**

本社・工場 〒543-0024 大阪市天王寺区舟橋町 3-1  
TEL 06-6768-3401 FAX 06-6764-7040

東京営業所 〒140-0013 東京都品川区南大井 3-23-12  
TEL 03-3761-8191 FAX 03-3761-8194